

平成二十三年 度 入 学 試 験 問 題

国 語

第 二 回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- 一、問題は一ページから七ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「自然」への憧れを語るとき、前提されているのは、「人間」との二元的な対立です。「自然」を、「人間による支配」から解放することが、目標にされています。しかし、⁽¹⁾この対立そのものが問題なのです。

たしかに、「自然」と「人間」の対立は、古くから常識的になってきました。「自然」と「人工」は、しばしば対義語として使われますし、「自然」と「文化」の対立も、同じように考えられます。人為的ではない「自然」に対して、「文化」が人間的現象であることは、いわば定義に属しています。そのため、エコロジーでも「自然」を考えると、人為的ではない「自然」が^(ア)ソウテイされてきたのです。

しかし、人間抜きの「自然」とは抽象的な虚構にすぎません。人間が眼前に見いだす「自然」は、それに先立つ世代によって手の加えられてきた「自然」であって、「社会的形成物」と表現できます。「自然」は、つねにすでに、多くの人々によって手が加えられ、また今後も手が加えられていきます。人間の活動を離れて、「自然」が独立にあるわけではありません。その意味では、「自然」は、「文化的形成物」と呼んでも、⁽²⁾間違いいではないでしょう。

このように考えると、実践的な方向についても、⁽²⁾重大な指針が示されるように思えます。いままで、環境保護のためには、人間が自然にできるだけ介入しないことが、求められてきました。人間が自然から手を引くことが、エコロジーだというわけです。ところが、そんなことは、そもそも不可能ですし、望ましいわけでもありません。むしろ、人間が自然をどう⁽³⁾していくかが重要なのです。それを理解するために、アルド・レオポルドの『野生のうたが聞こえる』を見ておきましょう。

レオポルドといえば、自然保護の原理を打ち出した実践家として、きわめて有名です。彼の原理（「土地倫理」）は、多くの場合、人間中心主義を批判するものとして理解されてきました。たとえば、彼はつぎのように語っています。「土地倫理は、ヒトという種の役割を、土地という共同体の征服者から、単なる一^(イ)コウセイ員、一市民へと変えるのである。」しかし、この立場は、自然にいつさい手を加えないことを主張してはいけません。レオポルドは、『野生のうたが聞こえる』の最後を、つぎの言葉で結んでいます。

まとめて言うならば、われわれの現在の問題は、土地に対してどう

いう姿勢でのぞみ、道具をどう使用するかということである。われわれは蒸気シャベルを用いて、かつては人力でつくられたアルハンブラ宮殿を^(ウ)カイシユウしようとし、その規模の^(オ)壮大さを得意に感じている。そのシャベルをとっても手離す気になれない。「…」われわれに本当に必要なのは、そうした道具を有効に使うための、もつと穏やかで客観的な^(エ)キジユンを持つことなのだ。（レオポルド『野生のうたが聞こえる』）

レオポルドの仕事は「森林管理」ですが、彼はその経験を通して「土地倫理」を形成したのです。その点では、人間の介入しない「土地倫理」はあり得ない、と言わなくてはなりません。

では、「自然」にどうかかわればいいのか。ブライアン・ノートンという環境保護論者は、『持続性』という本のなかで「適応的管理」という概念を提出しています。彼は、「環境プラグマティズム」の立場から「人間中心主義」を^(オ)トナエ、自然に対する「管理」を力説しています。しかし、「管理」といっても、あくまでも「適応的管理」であって、⁽⁴⁾従来批判されたような「人間中心主義」ではありません。では、⁽⁵⁾どんな「人間中心主義」が擁護可能なのでしょうか。

「人間中心主義」とは、「人間の利益実現を中心に置く立場」を意味します。しかし、このとき「人間の利益」をどう考えるかが問題です。たとえば、ある種の生物が食糧として「経済的な利益」になるからといって、乱獲してしまえば絶滅してしまい、結局は「経済的利益」に反します。そこで、「経済的利益」のためにも、⁽⁵⁾生態学的観点が必要になります。しかも、「人間の利益」を「経済的利益」に限定する必要もないでしょう。「人間」が多面的に理解できるように、「人間の利益」も多様な側面から理解できるからです。人間の生存にとって、きれいな水や土壌や空気などは、人間の利益と言えます。

また、「人間の利益」という場合、しばしば誤解されるように、個人の欲求を短期的な観点から求めるだけではありません。むしろ、地域や社会の利益を考えて、個人の欲求を抑制することもありますが、あるいは、将来世代のために、現在の利益が制限されることもあります。その点では、「人間中心主義」だからといって、現在の個々人の欲求をそのまま認めるわ

けではないのです。ぎゃくに、長期的な視野に立って、広い観点から利益を考慮する必要があるわけです。

さらに、「人間中心主義」は、「精神的価値」についても否定しません。かつては、「人間中心主義」といえば、物質的欲求だけをもち、精神的価値を排除すると、見なされてきました。しかし、ノートンも言うように、「人間中心主義者」たちは、しばしば自然を精神的に評価しています。

いままで、「人間中心主義」を批判するとき、「人間」が「自然」を「搾取」するといったイメージで、考えられてきました。しかし、現在では、このようなイメージで「人間中心主義」を無邪気に主張する人はほとんどいません。人間の利益を実現するには、自然の生態系を無視できませんし、短期的な視野から自然を開発しても、長期的にはかえって不利益になることも多いのです。むしろ、自然に適応する形で、長期的な観点から自然を管理すべきことが、目指されています。

このように考えると、⁽⁶⁾自然を理想化して人間中心主義を反省しても、問題の「隠ぺい」にしかならないでしょう。むしろ、いま必要なのは具体的な問題のなかで、広い視野に立って長期的な観点から自然を管理することではないでしょうか。

(岡本裕一朗『12歳からの現代思想』)

★生態学…生物の生活に関する科学。

★隠ぺい…目につかないようにかくすこと。

問一 — (1)「この対立そのものが問題なのです。」とありますが、筆者はなぜ「この対立そのもの」を問題だと考えているのですか。「この対立」

が何をさすか明らかにするようにしつつ、本文の表現を用いて、六十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問二 — (2)「重大な指針」とありますが、これはどのようなことですか。次の説明文の空らんに入れるのにふさわしい語句を、本文から抜き出しなさい。

人間が自然から (あ) (四字) ことが望ましいのではなく、むしろ人間が自然に (い) (二字) しなければならぬということを前提に自然保護の方法を考えていくべきだということ。

問三 (3) に入れるのに最もふさわしい漢字二字の語を、本文から抜き出しなさい。

問四 — (4)「従来批判されたような『人間中心主義』」とありますが、この内容を端的に示している十五字以上、二十字以内の表現を、本文から抜き出しなさい。(かぎかつこや句読点があればそれも字数に含み、必ず一マスを用いること)

問五 — (5)「どんな『人間中心主義』が擁護可能なのでしょうか。」とありますが、擁護可能な「人間中心主義」とはどのような立場ですか。本文の表現を用いて、五十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六 — (6)「自然を理想化して」とありますが、「自然を理想化する」とはどのようなことですか。その説明として、最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あるべき自然として、人為的ではない自然に憧れること。

イ 都会の生活を否定して、自然の中の生活を求めること。

ウ 従来の環境保護とは違って、自然を人為的なものと考え直すこと。

エ 人間と隔離せず、身近なものとして自然をとらえ直すこと。

問七 — (ア) (オ) のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 従来、環境保護のために、人間は自然から離れるべきだと主張されてきたが、これは見直されるべきである。そうではなく、自然はもともと人間によって創造されたものであるから、今後も人間の創造によって広げていくべきなのである。

イ 現在私たちが目にする自然は、ありのままの自然ではなく、これまでの人間の活動によって形成されてきたものである。私たちは人間から独立した自然を目指すのではなく、いろいろな角度から自然との適切な関係を考えるべきである。

ウ 「文化」は人為的現象であり、自然とはまったく異なるものであると考えられてきたが、現在では否定されつつある。あらゆる「文化」は自然から形成されてきたのであり、私たちは文化形成のためにも、自然を保護する必要があるのだ。

エ 私たちは、「人間が自然を保護する」ということを当然だと考えがちである。しかし、逆に「自然が人間を保護する」ことにも思いをめぐらすべきである。自然との関わりなしに、人間の活動は不可能であることを理解しなければならない。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちはさつき来た道を引き返し、再び、海の方へと向かった。ポチは吉田俊樹くんの手から魚肉ソーセージをもらったのがよほど嬉しかったのか、すつかり懐いて、彼の数歩先を跳ねるようにして歩き、ときおり私たちの方を振り向いては満足そうにシッポを揺らした。そのたびに吉田俊樹くんも、ポチはええ犬や、ポチはええ犬や、とうなずいて見せる。一方、ポチとミケも互いに馴染んできたようだった。並んで歩き、ときおり、鼻面を近づけたりもする。ポチはごちそうを奪おうとしなかったミケに対し、ようやく心を許したのかもしれない。いや、犬だけではなく、人間の気持ちをも、だるうか。小春にもシッポがあったら、きつと、びんぴんとちぎれそうになるくらい振っていたに違いない。彼女はさつきまでの不機嫌が嘘のように楽しげで、吉田俊樹くんの隣りでスキップをしていた。

海岸にたどり着く頃には四時過ぎになっていたけれど、砂浜は相変わらず賑わっていた。吉田俊樹くんはきよるきよるとあたりを見回し、夏の海はええなあ、綺麗なお姉ちゃんがぎょうさんおるもんなあ、と言った。でも、高田今日子ちゃんたちの姿はもうどこにも見あたらなかった。

私たちは熱い砂の上に腰を下ろして、ぼんやりと海を眺めた。ポチはまた波打ち際へと駆けていき、気持ちよさそうに水と戯れ始めた。ミケもその後を追った。

「かき氷か何か、食べるか？」と吉田俊樹くんは海の家の方を振り返って言った。

「買うたるで。僕、こないだ、おこづかい、めっちゃ貰ったんや」

「いらなーい」と小春が言った。「あたしたち、さつき、ここでかき氷食べたんだよ。それに、吉田くんちでもずいぶん飲んだり食べたりしたし、これ以上何か口に入れたら、きつとお腹をこわしちゃう」

「吉田くん、食べたきゃ、ひとりで食べていいよ」と私は言った。

すると、吉田俊樹くんは、
「ふうん。それやったら食べん方がええわ」とひどくつまらなそうにつぶやいた。

「僕、ひとりでものを食べるのには、ほとほと飽き飽きしてるんや」

やはり、彼はひとりぼっちで食事をする人が多いのだろうか。何だか可哀想に思えてきて、私たちは焼き玉蜀黍を一緒に食べることにした。

30

25

20

15

10

5

(1) 小春は、ここぞとばかりに得意げに早食いを披露した。くるくるくるくるっと器用に玉蜀黍を回して粒々を歯でこそげ落としてゆく。そのスピードたるや、いつにも増して、ものすごいものがあつた。

「かっこええなあ」吉田俊樹くんは感動しきつた声を上げた。「あなたにそんな芸があるとは思ひも寄らんかった。大したもんや」

そして、彼は期待に満ちたまなざしを私の方へも向けてきた。

「悪いけど、あたしにはできないよ」

「へえ。ふたごでも、ひとりにはできて、もうひとりにはできんことがあるの？」

「そうだよ。そんなの決まつてるじゃない」私は少しむつとして答えた。

「でも、せやかて、ダンスやったら、ふたりともむちゃくちゃうまいやないか」

「そりゃあね、ダンスはずつと一緒に練習してきたからね」

吉田俊樹くんは焼き玉蜀黍をかじりながら、実は私たちのダンスのファンなのだ、と語り始めた。どうやら彼は私たちが学校の体育館の隅っこで猛練習をしていたのを何度も見かけていたらしい。

「えらい頑張ってるし、どんどん上手になつてくなくなつて思つたら、TVに映つてるやないか。ほんまにたまげたわ」

「あたしたちだつて、びっくりしたよ。まさか、コマージュルに出ることになるなんて思つてなかつたもん」と小春が言った。

「ほんと、そうだよ」と私もうなずいた。

「でも、ええやんか。楽しかったんやろ？ 僕、何かうまく言えんけど、あのコマージュル見て、よかつたなあ、つて思つたわ。ほら、僕、事故にあつて死にかかつて、一年近くも病院にいたやろ？ で、助かつたはええけど、退院したら一年下の子らと同じ学年にならなあかんようになって、おまけにお父さんとお母さんはえらい仲悪くなつてるし、それでも、まあ、死ぬよりはマシやし、いろんなことをあんまり気にせえへんようにはしてたんやけど、正直言つて、あの頃は、ちよつとしんどい気持ちになることもあつたんや。そんなときに、あんなたちのダンス見て、何でか知らんけど嬉しくなつたわ」

「日和ちゃんとあたしはね、ミュージカルに出たいんだ」と小春が言った。

「へえ。そら、ええなあ」

「出れると思う？」

60

55

50

45

40

35

「あんたらなら、出れるんとちゃう?」

「うーん。でもね、あたしたちインドに行くことになっちゃうかもしれないからさ」

「え? インド?」

驚いている吉田俊樹くんは、私たちは諸事情を説明した。父が仕事の都合でインドへ行くことになったこと、それから、小春と私がミュージカルに出たがっているせいで両親が喧嘩をしたらしいこと、母はインドへは行かないと言っていること、もしかしたら、ふたりが離婚することになるのではないかと、と私たちが内心怯えていること……等々。他の友達には何となく話せずにいたことを、どうしてかすらすらと打ち明けることができた。

吉田俊樹くんは、ふん、ふん、と、ときおり相槌を打ちながら熱心に私たちのお喋りに耳を傾けていたけれど、話が一段落すると、⁽³⁾ ばん、と威勢よく両手で膝を叩き、

「何も悩むことないやんか」と妙にさばさばとした口調で言った。「僕があんたらやったら、迷わず芸能人になるなあ。才能があるのに、踊らんことはないで。ちよつと考えてみたらええんや。どうして、子どもはタイヘンなんやと思う? からだがちよつちやくて大人と喧嘩してもかなわんから、大人の方が間違っても、我慢しておとなしゅうしてんとあかんのがつらい。それから、もうひとつ。子どもには稼ぎच्चゅーもんがないんがつらいのや。そう思わんか? あんたら、芸能人になれば、自分の力で稼げるんやで。そうなれば、親が離婚しようが、どうしようが、コワイものあらへんやないか。自分たちで住む場所だつて決められる。好きなときに遠くへだつて行ける。僕なんか、ごつつう羨ましいわ。何なら、僕をあんたらマネージャーに雇つてほしいくらいや」

さすが⁽⁴⁾ 長老と呼ばれるだけあつて、彼は達観しているというか、ひねているというか、ものの考え方が他の子どもたちとは違うのだった。いや、でも、もしかしたら、同じように感じている子どもたちが本当はたくさんいるのかもしれない。ただ、それを言葉にすることがないだけで——特に大人たちの前では。

「じゃあ、あたしたちが有名なダンサーになったら、吉田くんをマネージャーに雇つてあげるよ」と小春が言った。

「ああ。頼んまつせ。せいぜい高給でお願ひしますわ。その代わり、僕、あんたらを悪いようにはせえへんで。めいっばい働いて、小春日和をすこ

いスターにしてみせるわ」

「じゃあ、あたしたちは皆で助け合つて生きていくんだね」

「そうや。家族みたいに助け合つて」と吉田俊樹くんは楽しそうに言った。何メートルか先では、ポチがまだ飽きもせず、ミケと一緒に寄せては引く波と戯れて、からだをびしょびしょに濡らして跳ね回っていた。でも、ときおり、こちらの方を振り返り、私たちがちゃんと待っていることを確認するのも忘れない。

いつのまにか陽はだいぶ傾いて、水面の照り返しも目に突き刺さるような強烈なものではなくなっていた。もう夕方なのだ。周りの人たちも帰り仕度を始めている。うんと幼い頃から、私はこの時間の海が好きだった。翳り始めた光の強度がからだにしつくりと馴染む。すべてが柔らかな色調に包まれて、ようやく海が私を受け入れてくれたような、そんな優しい雰囲気⁽⁵⁾が漂うからだ。

思えば、父と一緒に海辺を散歩するときも、だいたいがこの時間だった。父を間に挟んで、小春と私は父の両手を片方ずつ大事に握り、砂浜をゆつくりと歩いたものだ。父は遠くを指差して、あつちが鎌倉、その隣りに見えるのが江の島、こつちは葉山の方向だ、と言いつつ、小春と私は黙つてうなづく。海面はちよつちやな宝石を何千も、何万もちりばめたみたいにきらきらと輝いていて、たまに遥か遠くの方で、魚が煌めき跳ねるのが見えた。今お魚がびよんつてしたよ、水の中から飛び出してきたよ、と私たちが騒ぐと、父は鷹揚に、飛び魚だらう、と言つた。飛び魚つて? 背中⁽⁶⁾に羽がついた魚だよ。どうして、魚なのに羽がついているの? そりゃあ空を飛ぶためだろう。じゃあ、どうして鳥にならないの? 海で泳ぐのも好きだからだろう。じゃあ、飛び魚は空も泳ぎたいし海も飛びたい魚なんだね? と私が言うと、違つてよアベコベになつてゑ、と父は笑い、小春は言つた。ずいぶん欲張りな魚なんだね。

父の手はいつも温かく、さらさらと乾いていて気持ちがよくつた。その大きな手に触れてさえいれば、私は安心していられた。海には得体の知れないぬるぬるが潜んでいる。そのことを知つた後でも、父と一緒にいてくれるのなら、私たちは波打ち際を歩くことができた。私たちは怖いもの知らずのふりをすることができた。でも、父がインドへ行つてしまつたら、

誰が小春と私を守ってくれるのだろう。

(野中柀『小春日和』)

★達観…何事にも動じないで考えられる心境であること。
★鷹揚…ゆったり落ち着いていること。

問一

——(1)「小春は、ここぞとばかりに得意げに早食いを披露した。」とありますが、それはなぜですか。説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 吉田くんのおかげで不機嫌だった気持ちが直り、また、彼の家庭での孤独を聞き、何とか彼を楽しませたいと思ったから。

イ 吉田くんは自分たちのダンスのファンであり、また、その気持ちを込めて玉蜀黍をくれたので、その好意に報いたいと思ったから。

ウ 吉田くんがはじめにかき水をすすめてくれたのに断ってしまったことを悔やみ、何とか彼に機嫌を直してほしいと思ったから。

エ 吉田くんとのお話やペット同士の様子でも楽しい気分になり、今までのことになかった早食いに挑戦したいと思ったから。

問二

——(2)「彼は期待に満ちたまなざしを私の方へも向けてきた。」とありますが、彼はなぜそのようなことをしたのですか。その理由を七十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

——(3)「ぱん、と威勢よく両手で膝を叩き、」とありますが、この行為に表れている吉田くんの気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 将来の夢に対する両親の無理解に不満を持つ二人に対して、二人の才能からすれば実現は困難だとは思いつつも、友人として応援してあげたいという気持ち。

イ 父親の出張をめぐって、いろいろな面倒なことが起こっている二人に対して、親の都合に左右されることなく、自分たちの目標にむかってがんばってほしいという気持ち。

問四

——(4)「長老と呼ばれる」とありますが、吉田くんが「長老」と呼ばれるのは、他の友だちにはない特徴があるからだと考えられます。考えられることを二つ、それぞれ二十字以上、二十五字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

ウ 家庭の不幸のために途方にくれている二人に対して、自分も入院生活という同様の経験をしているから、アドバイスをするなどして、力になってあげたいという気持ち。
エ 両親が離婚の危機を迎えている二人に対して、親は親、自分も自分とわりきり、むしろ両親が離婚することを前提に、二人だけで生きる勇気を持つてほしいという気持ち。

問五

——(5)「安心していられた。」とありますが、「心」を使った慣用句一～五の意味を、次の「意味」ア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 心を配る

二 心を奪われる

三 心を砕く

四 心を引かれる

五 心を許す

「意味」

ア 信用して、うちとける。

イ 興味をひきつけられる。

ウ いろいろ考えて苦しむ。

エ いろいろと気をつける。

オ 夢中になる。

問六

次の一文は第一段落の中に入るものです。入る直前の文末五字を抜き出しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

吉田俊樹くんは犬の気持ちをつかむコツを心得ているみたいだった。

問七

本文中の□で囲まれた段落では、会話文にもかきかっこ(「」)が使用されていません。そのことよって生じる効果の説明として、最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この段落が夕暮れの海が見せる幻想であることを示し、登場人物の存在の印象を希薄にする効果。

イ 誰の会話なのかわからないほど会話の切れ目を不明確にすることで、親子の気持ちの一つであることを表す効果。

ウ 父が一方的に話しつづけたことを印象づけ、父と過ごした時間に対する「私」のいとおしみを暗示する効果。

エ そこで交わされる会話は、他の段落とは時間が異なり、「私」の回想の中の出来事であることを明示する効果。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小春と日和は、テレビのコマーシャルに出たことがきっかけで芸能界に入り、将来はミュージカルに出たいと思っている。しかし、父親のインド赴任にともない、家族がどうなるか結論が出ていない。姉妹は吉田くんに事情を説明したが、彼の助言によって心の底から安心できたわけではない。

イ 小春と日和は、ダンスに打ち込んでいたふたごである。ふたりの練習ぶりをよく知っている吉田くんと海辺で会話をするうちに、自分たちの夢とともに家庭の問題も彼に打ち明ける。彼の意見は普通の子どもとは異なり、きわめて現実的なものであり、姉妹は問題解決の方法を見つけ、ほっとする。

ウ ふたごである小春と日和はミュージカルに出ることを夢見て、ダンスの練習にはげんでおり、テレビのコマーシャルにも出たことがある。しかし、現在は、父親のインド転勤をめぐって家庭内が動揺している。姉妹は吉田くんに事情を打ち明けてみたものの、不安は完全にぬぐいさることはできない。

エ 小春と日和はダンサーになることが目標で、学校の体育館で練習をするときもある。その練習を見られたことがきっかけで話をするようになった吉田くんは、クラスメートからも一目おかれる少年である。姉妹は他の友達に言えないような心配事も彼には打ち明けることができ、胸のつかえがとれる思いがした。

